

< 2004年9月 >

「兵は凶器なり」(42)

15年戦争と新聞メディア

1935 - 1945

太平洋戦争開戦と朝日新聞

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

太平洋戦争はついに火を噴いた。「日本はいつ開戦するか」という決定は、いうまでもなく陸海軍統帥部の最高機密である。

日米交渉の責任者である東条英機内閣の外相・東郷茂徳でさえ事前には軍から知らされず、十一月二十九日の大本営政府連絡会議で軍令部総長・永野修身を問い詰めて、やっと「十二月八日開戦」を聞き出したほどである。

その機密漏洩には、死刑を最高とする極刑が待っていた。(1)

それを、『東京日日』(現毎日)は見事にスクープした。

朝日はどうだったのか。

『東京朝日』の八日付の朝刊に目を転じよう。この日の第一面のトップは「時難突破の士気昂揚、けふ第二回中央協会議」という予告記事が載っている。

その左側には四段見出しで「泰に戦禍の恐怖深刻化、首相、独裁権を掌握、首都の移転も準備中」。日米会談が重大段階にさしかかっていることをうかがわせる「米政府の態度硬化」の四段見出しの記事が中央にある。

二面の社説は「満州農業と食糧の自給」「赤都の南部で激突、独軍五市の占領」「対ソ戦線結束強化」というヨーロッパでの戦線の報道がある。

社会面では第二回中央協会議の話題のほか、お米の割当量を再検討という「ブロック別経済部長会議」のニュース、初めて早稲田の杜から女の学士四人が巣立つという町ダネが載っており、開戦日という緊迫したニュースはどこにもなかった。

『朝日』は開戦を全く知らなかった。

寝耳に水の出来事だった。『東京朝日』で当時、整理部員で政治面を担当していた飯沢匡（その後、劇作家）は、開戦当日の紙面を作った。

飯沢の回顧では - 『この日は何も無い。トップニュースに困った。原稿はないかと思い、東亜部へ行って見たがない。工場へ降りて組み置きの記事を使い、何とか仕上げた。いつもとかわらず平穩そのもので、午前二時ごろ帰宅した飯沢はぐっすり眠り、開戦の臨時ニュースも知らなかった。飯沢は昼ごろ起き、社に出て初めて知った』(2)

当時の朝日にも海軍、外務両省などの担当記者から「開戦近し」の情報は入っていた。ただ、決め手の「十二月八日開戦」の事前情報はなく、これが開戦日の朝刊が後手に回った原因、とされてきた。開戦前夜のデスクを務めた春海鎮男（のち東京本社整理部長、出版局次長）によると、当日の状況はこうである。(3)

七日（日）日曜の出番デスク、終日大した材料なし。零時過ぎ締めきり。……日米関係がいよいよ決定的な段階に入って、ここ数日「八日説」「十五日説」と月曜日（あちらの日曜日）開戦説の二本の線がうわさとしてはデスクに入っていたが、きめ手がまだない。（『朝日社報』一九五四年〔昭和二十九年〕二月二十五日号の「二十五年間の最悪の日」）

編集局長だった野村秀雄（後のNHK会長）は、早朝の社からの電話でたたき起こされた。開戦の詔勅が発せられたこと、『東京日日』の紙面を知らされると、野村は黙って聞いていたが「それ以上言うな」と電話を切り、あわただしく出社した。

「東日は万事知っていた。朝日は何も知らない、という紙面だった。……大東亜戦争に関するかぎり、緒方さんも深くはわからなかったようだ。朝日は多少軍から袖にされていた。緒方さんの大記者としての永年の経歴、各方面との深い接触からいって、あれ程のことだから、普通に考えて、多少とも匂いがかかっているべきであったのに、全然は聞いていない。満州事変から二・二六事件あたりまでは、この種の情報がはいていたように思う」と指摘。(4)

なぜ『朝日』は『東京日日』に敗れたのか。

そのためには当時の『朝日』の状況を知らねばわからない。

東条内閣が成立した一九四一年十月十八日にドイツ駐日大使館員、リヒャルト・ゾルゲがスパイとして逮捕された。重大事件として、この事件は一切外部に発表されなかったが、ゾルゲ逮捕の三日前に元朝日記者で満鉄嘱託の尾崎秀実が同じ容疑で逮捕されていた。

尾崎は近衛内閣ブレンをしており中国問題の権威だった。朝日を退社後も朝日社内に顔を出し、多数の友人や知人がいた。軍部の動向は田中慎次郎政経部長らから聞いていた。

尾崎に続いて、田中が逮捕され、朝日で陸軍省担当記者の磯野清も引っぱられた。新聞社の人間がスパイ容疑で次々に逮捕されるという前代未聞の事件だけに、社内にはパニック状態に陥った。『朝日』は容疑の内容、捜査の進展を必死になって探った。

ある検事は「こうなった以上、朝日としては速やかに編集の責任者を引責させるなど、明白な処置をとった方がよい。愚図愚図しておれば、重役から社長までも累が及ばないとも限らぬ」と忠告した。(5)

野村秀雄編集局長、緒方主筆も後に、この責任をとって、地位を去った。政府をはじめ陸軍、海軍とも、『朝日』に対してはより一層厳しい目を向けてきた。

これに伝統的な『朝日』は反軍的とする風潮が底流にあり。ともすれば陸軍、海軍からうとんじられ、敵意をもって見られたのである。

東日の開戦スクープは敗戦とともに忘れ去られた。国民の気持を代弁するスクープ、国民の知る権利を擁護し、不利益から守るスクープではなかった。有史以来の大惨害をもたらす災厄を伝えるメッセージとなったのである。

(つづく)

参考引用文献

- (1) 『歴史の瞬間とジャーナリストたち—朝日新聞にみる20世紀』五十嵐智友著
朝日新聞社 1999年1月刊 243P
- (2) 『権力と笑いのはぎ間で』 飯沢匡 青土社一九八七年六月 三五八 - 三六〇頁
- (3) 『歴史の瞬間とジャーナリストたち—朝日新聞にみる20世紀』243 - 244P
- (4) 『野村秀雄』 野村秀雄伝記刊行会 非売品 一九六七年六月刊 146 - 147P
- (5) 『人間緒方竹虎』 高宮太平 四季社 一九五八年十月刊 152P